

# 柏木義円『上毛教界月報』論文註解稿（一）

市川浩史

## ◎凡例

- ・本論考は、柏木義円が編集、執筆した『上毛教界月報』の巻頭などの論文を翻刻し、それに簡単な註と解とを付したものである。『上毛教界月報』は柏木が安中教会に（仮）牧師として赴任した一八九七（明治三〇）年の翌年から約四〇年に亘って刊行された。本論考は紙幅の関係でその第一号から第七号までを収めている。
- ・もとの本文では、変体仮名が使用されているが、本論考ではそれを現在通用している仮名文体に直し、かつ適宜句読点を付した。
- ・『上毛教界月報』誌のほとんどの巻頭論文は柏木自身の筆によるが、署名が付いているものはきわめて少ない。また巻頭以外の論文もいくつか含まれていて、署名があるものもないものもあるが、それらすべてが柏木が執筆したものと考えられるので、本註解の対象としている。ただ、特定の個人などについての論説は除いた。

## ◎本文、並びに註、解

○第一号（明治三十一年一月一五日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎<sup>①</sup>  
教会の姉妹に告ぐ

既に神の御恩恵に由り教会に列なりたる姉妹は一人も残らず左の件々

御実行を望みます。

（一）信徒の生命 主基督が約翰伝十五章に説き玉ふたる葡萄の樹の譬喩を読みますれば善く信徒の生命と申す事が分ります。葡萄の枝が善く繁り多くの実を結ぶのは其幹に連なりて葡萄の樹の生命が貫通て居るからであります。若し其枝が幹より切り離されますれば樹木の生命が貫通致しません。故に直ぐ枯れてしまいます。其の如く信徒も神に連なり紙と偕に居るとはドウ云ふ事かと申しますれば常に神の御事を思ひドウか神の御心に協ひたいものだ。何か神の為に致したいものだ。幸なる芽に逢へば必ず神に感謝し過失あれば噫神に済まぬ事を致したとて神に罪を詫びる様な心を持って居るのハコレハ神が私共の心に在り玉ふ証拠であります。此心を神より玉わりしは此上なき幸福にて簡様な心掛ある方は深く神に感謝す可き筈であります。ケレドモ不幸にして名は信徒たること此心掛とは更になく一日の中乃至数日一回も神の御事を思はず只々己れの事をのみ思ひ居るはコレ神に離れたるものにて幹より切り離されたる葡萄の枝の如く枯死するものであります。斯る人々は早く悔改めて元との幹に連なりませんならば甚だ禍で御座ります

（二）聖書 生命がありましても滋養物を食べませんならば次第々々に身体が衰えてしまいます。聖書は信仰の生命を養ふ滋養物であります。信徒が日々聖書を読む事を怠りますれば信仰の生命は次第に衰へてしまいます。神に事へて日々を送らんと心掛くるならば是非聖書を読んで神の御旨を伺はんければなりません。聖書を読む事を怠るは

我々が神に事る誠意なき証拠であります。

(三) 祈禱 日光の照らさざる所に在る草木は葉の色も悪しく花も美しくありません。而して其草木は死んだやうに見えます。信徒が神の暖かなる聖霊の光を受けるは祈禱に由る事であります。祈禱なき信徒は自然冷かにて日蔭にある草木の様なものであります。保羅は「何事をも思ひ煩ふ勿れ。唯何事に祈禱をし懇求をし且感謝して己が求る所を神に告げよ」と申されました。子が何事も親に懇求する様に天の父に祈るは神の尤も喜び玉ふ所と存じます。信者となりて窮屈に感ずるのは此祈禱の心が無いからであります。信仰冷へて祈禱の念なき様の時は特に勉めて祈禱会に出で他の兄弟の熱心に接する事が大切であります。別して連夜若くば連朝の祈禱会は一回と祈禱の精神加はるものでありますれば信仰を新たにするに尤も力があります。

(四) 安息日を守る事 子供が相和して打揃つて親の前に出るは親にとりては此上なき傾喜であります。信徒が各々我は我たり自分丈け身を修めて居れば宜しいと申して居りましたら父なる神の御意は如何でせう。一人々々銘々蜜室で神に交るは大切であります。なれども又兄弟姉妹打揃つて会堂へ集まり和氣藹然心を合せて神を礼拝讃美するは父なる神の一人の御喜びと存じます。又謙遜して道を学ばんと志すものは聖日には会堂に来て神の道を学ぶ筈です。又教師の説教たとい自身には益少しとしても盛大なる集会は教師の説教に力を加へ集る人々に何となく感動を与えるものであります。多くの人々が神に事るの心を以て集りし集会は教師の説教に劣らず知らず覺へず大なる感化を来会者に与るの力を有て居ります。去れば信徒は必ず教会の集會に集りて其集會を盛大に致さんければなりません。コレハ信徒の大切な義務であります。日曜の礼拝の集會は信者の家族は是非都合して多く集りて戴きたい。相成る可くは未信者を誘引して来りて戴かば伝道は必ず挙げられます。所謂代参の様に一家にて一人仁義務として集會に出すと申す様にては教会は振起致しません。私共信徒は口癖の様に神の御旨に従ひたく思ふなれども信仰なく能力なしと申します。併し己れの為

し得る事を為さずして只能力なしと申すは誠実ではありません。安息日を潔く守りて神の教を学び教会集會の<sup>3</sup>に集りて之を盛大に致す事は決心さへすれば出来ない事ではありません。私共は一日労働せざれば忽ち糊口に差支ゆると申す様に切迫せる生活にもあらず安息日を守る事の出来るだけ生活に余裕を神より与へられ居る事はをろそかに思ふ可きではありません。船長スコースビー<sup>3</sup>と申す人は捕鯨を致した折、規則を設けて安息日には漁り致さざる可しと定めました。去るところ漁期が終らんと致しますなれども一尾も取れませんでした。然るに一群の鯨が顕はれましたのは丁度日曜日でありました。他の船は争ふて舟を出しました。スコースビーは手下の者が不平を申して之を鎮むるに非常の困難を致しましたなれども手を束ねて見て居りました。併し翌月曜にも鯨は矢張り居りまして其沢山群り居ります事は昨日に替りませなうだ。スコースビーは他の船に劣らず鯨を得まして良心に快く感じました。新島先生<sup>3</sup>は特命全權大使に従て大陸巡行の際日曜日には独り留りて聖日を守られました。身も魂も神に献ぐるの決心を為せし信徒が安息日の礼拝に列するの閑なしとは申し難き事と存じます。

(五) 献金 信仰も之を実行の上に顕はしませねば堅固の信仰とは成りません。献金は信者が其信仰を実行之上に表はすに最も善き方法の一つであります。信仰より出でたる献金が集りますときは善き美しき事業を成す勢力となります。天国拡張の軍資であります、多く献金せしとて誇るに足らず、少しとて恥づ可きにあらず唯真心より出でたる献金は神の御前には真珠よりも貴くあります。老人でも少年でも男でも女でも五厘でも一錢でも如何の少額にても苟も信徒たるものは皆銘々献金す可きであります。コレ大に信仰の益となり受くるよりも与るは幸なりとの幸を成する事が出来まする。

## 註

(1) 「群馬県群馬郡高崎町字宮元町八十八番地」所在の高崎教会の牧師。

- (2) 新約聖書「フィリピの信徒への手紙」四章六節  
 (3) William Scoresby (一七八九～一八五七) はイギリスの探検家。  
 捕鯨船で北極地域を探検した。

- (4) 新島襄（本名、七五三太（しめた））は、一八六四年に脱藩後渡米した。東海岸のボストンでハーディー家の援助を受け、アモスト大学、アンドローヴァー神学校を卒業した。在米中、明治政府から派遣されてきた、岩倉具視を団長とする使節団に、ワシントン駐在の日本政府外交官であった森有礼の斡旋により、新島は密出国者から晴れて正規の留学生として認定された。のち神学校卒業後、一八七四年一〇月に帰国した。

## 解

『上毛教界月報』（以下、『月報』）誌の第一号の巻頭論文ということで作力である。教会につらなる信徒たるものの「実行」すべきことがらとして、信徒の生命、聖書、祈禱、安息日を守る事、および献金の五つに分けて語っている。現在の観点からみれば、やや硬い、もしくは形式的にすぎないように思えないでもないが、正統的であろう。ただ注目される点は、第四の「安息日を守る事」のなかで「私共は一日労働せざれば忽ち糊口に差支ゆると申す様に切迫せる生活にもあらず安息日を守る事の出来る丈け生活に余裕を神より与へられ居る」云々と語っていることである。週に一日の安息日を守るにたる財力を持った者が教会に集ったということをはしなくも述べている。日本の教会の限界、というべき点でもあるかもしれない。あるいは柏木義円にかかると認識に留まっていた、というべきかもしれない。

○第二号（明治三十一年一月二五日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎 根本的改革

嘗て万朝報英文欄に内村鑑三氏は論じて曰く<sup>①</sup>

政治が成し能ふ最上のものは既に在る所の社会の材料を最も能く使用するに過ぎざるのみグラットストン<sup>②</sup>氏の政治的伎倆を以てするを卑屈の民より自由自治の民を造出すること能はざるは猶ほ如何なる名匠と雖も瓦石より大理石の儀を刻み出すこと能はざるが如し。

道徳は人間に於ける社会的勢力なり。能く自己を中心とせる個人々々を結合して一団の結合体たらしむる「セメント」的勢力なり。此勢力強ければ強き程其社会の活力旺盛なり。ナポレオン<sup>③</sup>曰く戦場に於ては道義の力十の九に居ると。トマス・ムール<sup>④</sup>は下凡での社会的改良家は異口同音に道義に進まざる人民には到底理想的の社会組織を与うる能はずと自白せり。三千年前希伯来の王に由りて呼ばれたる「義は国を高くし罪は民を辱しむ」との格言は今も吾人を欺かざるなり。

政治は道徳に由て立つと雖ども道徳は亦独り自らのみに由て立ち能うものに非ざるなり。単純なる道徳は猶ほ砂漠に於ける泉の如きのみ。永へに絶へざる源泉を欠くが故に時に個乾するを免れざるなり。或は曰ふ良心は道徳の本源なりと。然りと雖ども良心なるものは或る何物かに対する責任の觀念ならざるを得ず。所謂無神論的良心は屢々全く無良心に陥るものなり。全国民若くば全人類を動かすが如き絶太なる道義的勢力は未だ其背後に宗教なくして活動せしを歴史は未だ嘗て示さざるなり。

又往日独立雑誌<sup>⑤</sup>に論じて曰く

今や国家を救はんと揚言するもの千百万を以て数へ國人一人づつを救はんと欲するもの殆どあるなし。大将のみを以て相統せる軍隊には戦闘力なし。政治家のみを以て成る国民は滅亡に帰せん。

宗教道徳が政治を生みし例はあれども政治が宗教道徳を生みし例あるなし。

築材なくして大工は家を造るを得ず。高貴なる国民なくして大政治家

も強固なる国家を造る能はず。今は築材欠乏の時なり。吾人は大工たるの野心を去りて樵夫又は石切りと成るの覚悟なかる可らず。是れ実に吾人が徹頭徹尾激賛措かざる所にして時弊に剴切なる至言と信ずるが故に之を此に抜抄したるなり。

第一維新に於ては我國民は世界に列して名誉ある成功を奏したりと雖も第二維新に至ては國民の精神を根本より改善するに非れば一步も進むこと能はざるなり。如何なる良制度も如何なる社会改良策も徒らに雛形たるに過ぎざるのみ。之を實用に為して其実効を改むるに至ては之を國民精神一変の時に待たざる可らず。近頃大隈伯は当分政界の紛擾を避けて専ら育英の業に執掌せん。人物雲の如く起らば國家の事業何かあらんと語られたりと当今覚めたるものは須らく此着眼なかる可らず。於是か彼ビュリタン徒が米國建國の基礎を定むるや己れの家屋に先て先づ學校と禮拜堂とを建立せし其意氣の偉大なるを追想せずんばあらざるなり。更に又先師新島襄先生が官途青雲の誘惑を絶て特更身を逆境に置き専ら育英と伝道とに身心を尽くされし其志想の卓絶なるを追懐し、転た感慨に堪へざるなり。然りと雖ども徳育の大根本立たざるの教育は未だ時弊を救ふに足らざるなり。天地の主なる正義仁愛なる神赫々として世に照臨し、道の大原此れより出で、尊嚴犯す可らずとの確信に基かざる徳育は決して滔々たる教育界の腐敗を救ふに足らざるなり。上帝の摂理儼然として冥々の間に世界の運命を指導し玉ふを信ずるに至らざれば決して國家百年の國是を定むること能はざるなり。今日神の眞道を發揮するは啻に個人々々の安心立命の道を開らき、一家の平和幸福を来らすに切要なるのみならず國家教育の根本的問題を決し國民自由の精神を發揮し滔々たる当今の時弊を匡救するに更に切要なるを覚ゆるなり。噫國を憂へ時を慨するの士盍之道を決して神の教を學ばざる、噫神に撰ばれたる我が党の志士何を憚りてか福音の証しを為すに躊躇する。

## 註

- (1) 以下、内村鑑三の「POLITICS, MORALITY AND RELIGION」(万朝報、明治三十二年五月二一日付「万朝報」記事からの抄出引用。なおこの部分は柏木自身による翻訳とみられる。『内村鑑三全集』第五卷(岩波書店、一九八〇)所収。
- (2) William Ewart Gladstone (一八〇九～一八九八)。英國の政治家。英國国教会の敬虔な信徒で、首相を四回務めた。
- (3) Napoléon Bonapart (一七六九～一八二一)。フランス革命の時期の政治家。のち第一帝政の皇帝にも就任した。
- (4) Thomas More (一四七八～一五三五)。英國の思想家。ユートピアを構想した。
- (5) 「東京独立雜誌」は内村が主筆となつてこの年六月に発刊した雑誌。

## 解

この第二号の巻頭論文は内村鑑三の文章を引用することで済ませた。『月報』の執筆、編集のありかたがまだ固まっていなかったことを示す一例である。他にも、第一号の発行が十一月一日であり、それに次ぐ第二号が十一月二十五日であることも同様であると考えられる。また、柏木が読んだ文章が「万朝報」のどういった記事(翻訳された文章か、英文の原著か)であるかは、決し難い。

○第三号(明治三十二年一月一日) 発行人兼印刷人 大久保真次郎<sup>1)</sup>  
如何にして教勢を振起せんか

如何にして教勢を振起せんか。唯吾人の決心に在り。実行に在り。忍耐に在り。祈禱に在り。而して上よりの力を待つに在るなり。吾人は之に就て多言せざる可し。乞ふ、吾人をして左の事に就て省察學ぶ所あらしめよ。



磯部新井に一老婦あり。齡既に七十有三、一昨冬、原市教会の祈禱会の微々振はざるを憂へられ深く感ずる所あられしと見へ、毎朝午前三時頃家を出て原市会堂に至り熱誠を凝らして神に祈られたり。新井より会堂に至る道程半里余而かも雨の夜も彼老体を以て膚を刺すばかりなる浅間の寒風を事とせせず会堂に通はるゝ事四十余日、遂に三十年の終迄続けられたりと。而して其祈られし所は台湾に幽囚の苦を嘗め居らるゝ宮口兄が早く赦免せられ且つ主に歸へられん為原市教会の振起せん為め、其令息某君の悔改せられん為めの三事にて在りしと。然るに宮口兄は本紙の信仰事実談中に具ゆる如く主の恵を担ふて歸へられ原市教会は昨冬の連夜祈禱会の如き六十名に近き盛会を見るに至り、後令息や未だ全く悔改を見ずと雖とも其心漸次改善するの様ありと。

由て彼老婦は深く喜で神に感謝し居らるゝとぞ。又「予は如何にして基督教徒となりしか」と題する内村鑑三氏の英文の書冊を読むに同氏が其嚴君を主に導かれし記事あるを見る、左の如し。

予は三年の間父に贈くるに書籍や小冊子を以てし絶へず書状を送くりにて彼が基督に來り其救を受けん事を懇求しつゝありたり。彼は元來讀書好きにてありたれば予が贈くりし書籍をば全く読まざりしには非りしも更に何等の感動をも受けざりき。彼は普通の道義に照らせば正しき人にてありたれば、尤も救の必要を感じざりし人なりし。或る学年の季に予は学校より若干の賞金を得たり。予は出來得る丈け尤も有益なる事に之を費さんものと考へ切に此事に付て神に祈りたり。此に於て予は在支那宣教師独逸人フエベル氏の馬可講義こそ尤も父に贈くるに適當なれと思惟したり。此書は五卷より成り学者の好評を博したり。此書は無点の漢文なれば之を読む事の困難なるは反て父の読書的嗜好を刺激するならんと思へ之を二円にて購ひ行李に収めて家に携へ歸へり父に捧げたり。噫失望し一言の謝辞も彼の唇より洩れざりしなり。予が尤も心を尽くしたる贈物は尤も冷やかに受けられたり。此時予は密室に退て悲泣したり。此書は反

古函の中に投ぜられたり。然れども予は其第一巻を取り出し之を彼れの机上に載せ置きたり。彼は閑暇無聊の時一枚程読で再び之を反古の中に投じたり。予は再の之を取り出し前の如く彼れの机上に置けり。予の忍耐は彼が彼書を却くるの心と氣根とを競べを為せり。終に予は打勝ちたり。彼は遂に第一巻を読了せり。此後彼は基督教を侮慢せざるに至れり。何物か彼の心に触れしものなかる可らず。予は又第二巻を初の如くに為し置けり。彼は亦之を読了せり。而して彼は基督教を賞揚し始めたり。謝す可き哉。彼は又第三巻を読了せり。此に於て彼の行為に變動を生じたり。彼は飲酒の量を減じたり。其妻や子供に對する彼の挙動は優しくなりたり。竟に第四巻は読了せられたり。彼の心は碎けたり。彼は曰へり。倅よ予は高慢なるものにてありたり。予は爾に誓はん、今より予は基督の弟子たらんと。予は彼を会堂に導けり。彼の全心は全く變化せり。彼が聞きし所のものは皆彼を感動せしめたり。武士的に男らしい彼の眼は今涙を以て湿ふたり。彼は最早酒盃を手にもせず。其後十二月にして受洗したり。彼は能く聖書を学び、爾來基督教信徒たり。其子の感謝の情は如何許りなりしか。読者乞ふ、之を察せよ。エリコの城は既に陥落せり。カナン<sup>③</sup>の諸城豈陥らざらんや。予が従兄弟子、予が叔父子、予が兄弟、予が姉妹、相續で父の例に倣ふに至りたり。諸君以上の事実を読んで果して如何なる感あるか。吾人は此新年を迎へて果して如何なる決心を為せしか。果して吾人に決心あるか。之を實行に施す可し。之を神に祈る可し。斯くて忍耐以て徐に上よりの力を待たば教勢豈振起せざるを憂へんや。昨年本紙に由りて各教会の形勢を按ずるに祈禱会の振わざるは各教会の通患なるものゝ如し。祈禱会の振はざるは吾人に神に求むるの誠意なきを表明するものに非ずや。神に求むるの誠意乏しきは吾人に信仰に進むの志なきを表明するものに非るか。主の御為めに何事か為さざらん<sup>(マ)</sup>と欲するの忠実心なきを表明するものに非るか。祈禱会は教勢振興の原動力なり。本年に於ては各教会の祈禱会が礼拝集会に劣らざるの盛況を呈せん事を吾人は

偏に主に祈るものなり。

# 註

- (1) この「明治三十二年一月十五日」をもって本紙は「通信省認可」を得ている。
- (2) 本誌第一号に「宮口二郎兄台湾入獄談」および本号に同「つき」が掲載されている。なお、宮口は原市教会会員で、県議を経て衆議院議員であった。
- (3) *How I became a Christian* (警醒社書店、一八九五)
- (4) フェベル(花之安)『馬可講義』五卷(出版地不明、大英国印書館、一八七四年刊行)現在、同志社大学図書館に所蔵されている。
- (5) 「エリコ」云々は、旧約聖書「ヨシユア記」六章に記された、神がイスラエルの民の代表たるヨシユアに「エリコ」の城を陥落させて与えた、という内容の話、「カナン」云々とは、かつて神が民にエリコを与えたように、このたびも民に「乳と蜜の流れる豊かな地」カナンを与えるであろう、の意。

# 解

本論文は、各教会で祈禱会が振わないという状況をうけて、現状を打破するための二つのエピソードを提示する。ひとつは「磯部新井」の「一老婦」、いまひとつは内村鑑三が父を信仰に導いたという話である。が後者は、内村がいかに苦心して父にマルコ伝講義を読ませるに至ったか、というストーリーなので、本論文の趣旨に叶ったものとは思われない。たしかに、たとえば第二号の「教報」欄に記された甘楽第一教会の教報のなかに「祈禱会の不振 富岡は毎水曜日信徒の家を廻りて祈禱会を開来しも出席者七八名を出でず。高瀬もを同様にて其他は殆んど皆無の姿なり」というものさえたので、祈禱会についての現状には厳しいものがあつたようである。

## ○第四号(明治三十二年二月一日) 発行人兼印刷人 大久保真次郎

上毛春期婦人大会近づけり

主に在る上毛の諸姉に告ぐ

上毛婦人矯風会諸姉に告ぐ

一夫一婦制は人倫の大本にして家庭の基礎なり。即ち此倫の紊乱は人情の敗壞なり。家庭の腐乱なり。腐乱せる家庭より成る国家は其所謂国家的事業が如何に壯觀を呈するも猶ほ肉破れ膿流るゝ癩病人が錦羅を纏ふて其外觀を張るの類に過ぎざるのみ、噫内地雑居の近きに在り。滔々たる肉破れ膿流るゝ此破倫非人情の醜体が世界の耳目に瞭露せらるゝの日は安ぞ知らん。為に世界の侮慢を来し我が国民が著しく其信用と同情とを失ふの日に非るを此事が具へざる所に於て国交際に困難を与へ国光を傷く可きは識者を待て後ちに知らざるなり。況や家庭は教育の基礎にして次代国家の運命は殆ど此に決するをや。人情破れ風俗頹る。滔々として此病深く社会の膏肓に入らば遂に全身潰敗の惨を見ざるを保せざるなり。思ひ此に至れば実に戦慄せざるを得ざるなり。対外上国家の威信を加ふる上に於ても社会上風俗を肅清し国民の元氣を勇健ならしむる上に於ても教育上倫理の觀念を正す上に於ても將た又人情の大本を立て国家の基礎たる家庭を清潔和平ならしむる上に於ても一夫一婦の大倫を立つる程緊急切要而かも重大なる問題は非るなり。然るに当今の所謂経世家も学者も教育家も此喫緊なる問題を等閑に附し去り、徒らに肉潰へ膿流るゝ、癩病人の為に錦羅を飾るに汲々たるの觀あるは実に怪訝の至と謂ふ可し。所謂政治家が年々一夫一婦に關する請願を無下に振り潰し殆んど馬耳に東風の如くなるは何等の奇怪ぞ。学者が此問題に關して唾の如くなるは何故ぞ。教育家は嘗て教育上の問題として之を論議したることありや。謂ふ勿れ。是不急の閑問題なりと所謂文明国に在りて日本の今日程此問題の緊切重要なるはなかる可し。世界何れの文明国か男女間の頹敗我國今日の如きものある見よ。此破倫の醜行ある畜に下等社会のみに非るなり。家庭の腐爛せるは反て中以上社会に在り。只壯麗なる家屋を以て之を掩

い去るに過ぎざるのみ。貴顕紳士偕ては所謂在来の宗教家が公々然破倫の醜行を為して反て揚々得色あるは滔々たる社会今日の顔象に非ずや。万朝報の蓄妾記事之を英米の社会に曝露せば果して如何当今の経世家之を経世の問題と為さずして反て恬然たるは我国社会果して良心あるか。社会の良心既に萎痺無覚なるか。宗教は之を刺激し之を覚醒す可きに非ずや。然るに現時我国多数の人心を支配し居ると称する彼仏教徒を見よ。彼大谷派本願寺法主大谷光瑩の如く多くの妾あり、私生児あり。而して恥ぢず。幾千の僧侶、幾千万の門徒亦之を崇拜して自らの良心を羞かしむ男女間風俗の敗壞は特に僧侶に甚しきは争ふ可らざるの事実なるに非ずや。然るに厚顔にも将来の国教を以て自ら擬するに至ては鉄面皮亦甚しと謂ふ可し。然らば我国従来の倫理思想を鑄造したる儒教は如何。畜妾を是認し離婚を是認し、一夫多妻を是認するのみならず寧ろ之を必要として倫理上之を奨励したるの傾向あり。而して我国現今の倫理理想は尚ほ此鑄型を未だ全く脱せざるに非るや。噫我現社会は錦羅を着飾りたる癩病患者なり。日ならず世界の耳目を騒がして其輕侮を招かんとす。然るに此患者を圍繞して益々其肉を潰破し、其骨を腐らしめんとするものは我国在来の倫理思想なり。我国在来の宗教なり。貴顕紳士と称する国民の先達を以て自ら居る可き輩なりと思ひ来れば転た痛歎に堪へざるなり。噫我党今日の要は凡ての方面より極力一夫一婦の大倫を世に明にするに在るなり。先づ従来倫理思想の妄謬を排破して倫理道德の思想を革新せざるべからず。痛く従来を宗教を膺懲して人心を其惑より救わざる可らず。而して益々社会の良心を警醒刺激して破倫の徒をして社会に立つの面目なきに至らしめざる可らざるなり。我群馬県の如き夙に天下に率先して廃娼を唱へて之を実行し、爾来一夫一婦の問題に触若するの機多く世人の注意を此問題に惹くの便あるは実に本県の慶事と謂ざる可らず。然れども吾人は廃娼其物よりも寧ろ該問題が一夫一婦問題の急先鋒となりて敵と鋒を交へ先づ軍の前途に敵陣の一角を抜きしを祝するものなり。我党の婦人問題に於ける前途尚ほ遙遠なり。非公娼派の勝利を

以て満足する可きに非るなり。且つ所謂非公娼派なるもの必ずしも一夫一婦の倫理思想に根柢を有するものに非るなり。倫理道德の見地よりするものに非るなり。或は政治上の懸引より甚しきハ一身上の利害や或る感情に由りて動くのみ。今日の非公娼派、明日の公娼派たらざるを保す可らず。思ふに一夫一婦の大倫を明にして社会の思想を根柢より一変するに非るよりは公娼問題は私利を公事に由りて営まんとする一種の投機者流の餌となりて永く本県の累たる可し。於是か吾人は来らんとする婦人大会に望まざるを得ざるなり。吾人は該大会が奮起して種々の手段を尽くして極力一夫一婦の思想を県下の人心に注入し啻に公娼派の本城を根本より覆へすのみならず県下破倫の徒して卿等の正義と赤誠に避易して憚る所あるに至らしめんと決意を表せられん事を希望の至に堪へざるなり。然らば其決意を果にする第一着手として吾人は卿等の大会に何を望む可きか先づ春秋両期に開かるゝ婦人大会の所在地に矯風大演説会を開て大に一夫一婦の大倫を始め婦人問題に関する健全なる思想を社会に鼓吹せん事に在り。其弁士は三好氏の如き、江原氏の如き、島田氏の如き、三宅岩本氏の如き一夫一婦の唱道者にして世に著れたる名士を二名程宛招聘し、専ら婦人方発起となりて普く其地方の重立特た人婦の方々を招待せば多数の謹聴者を得るや疑ふ可らず。経費は在上毛の姉妹にて毎月二銭程醸出せば弁するに足る可く之を集むるに尽力する人を得ば出金に困難を覚ゆる程の事は非る可し。且つ其地方教会有志者の賛同を得るは必然なれば費用に差支ゆる事はなかる可し。此の如くせば婦人大会も之に由りて大に盛会を見る可、風矯く事業に未信者婦人方の同情も博す可く、間接には教会の勢力を扶植するを得可く而して大に一夫一婦の大倫に関して気焔を揚ぐるを得可きなり。次は論行剝切にして何人にも解し易き小冊子を配布するに在り。是れ迄ありふれたるものに就て適當なるあらば之を撰択して用ひなば尤も便利なる可しと雖も特に上毛婦人会か矯風会かにて出版するも可なる可し。例へば一夫一婦の論や廃娼問題ならば岩本氏とか禁酒論や青年禁煙論に關しては誰とか尤も適當なる人

に特に起草を託するに在り。別して廃娼問題の如き婦人会の婦人か矯風会の方々が主となりて上毛に於ける廃娼後の結果並に将来の見込等を調査して之を送くりて起草者の資料と為す事尤も必要ならん。固より斯くするには起草者の報酬始め十二分の費用を投じ成る可く善き物を得るが肝要なれば多くの費用を要すべしと雖も目的さへ確立せば費用支出の方法亦是れ困難に非る可し。只此未の方法の如き自ら諸姉の名案あらん。要之するに吾人は此春期婦人大会より一夫一婦の大飾を掲げたる運動が毅然として起り来らん事切望の至に堪へざるなり。諸姉が国家の為に内地雑居に対するの準備、蓋し之に過ぎたるはなかる可く、国家の品位を高め世界の信敬を増すは此に在り。況や家庭問題教育倫理問題社会問題、之に由りて解釈せらるもの多々なるをや。吾人は婦人大会諸姉の振起を望むや切なり。

## 註

(1) 「内地雑居」とは、本来、明治期、いわゆる条約改正後、外国人が国内に自由な居住や移動を許可されたことを指す語彙であるが、この箇所では別に意味に用いていることが明白である。柏木の曰く、「二夫一婦」の倫理を蹂躪する「婦人問題」、具体的には公娼問題に関して、娼婦と娼婦以外の一般国民とが「雑居」、つまり住所などを区別することなしに居住することを意味していると思われる。この言い方はこの論文中、二か所で用いられているが、当該期の柏木の女性観を何うに興味深い。

(2) 柏木が一夫一婦について論じるとき、必ずといってよいほどの批判対象とされたのが、東本願寺第二代法主であった、現如上人こと大谷光瑩（一八七二～一九二三）である。法主在位が一八八九年から一九〇八年のことであるから、ちょうど、『月報』のこの記事が書かれたとき、まさに現職の法主であった人物である。大谷の女性をめぐる醜聞については当時、新聞などで盛んに取り上げられ、同時代人には周知であったと思われる。

(3) 「三好氏」は日本基督教矯風会の有力メンバーであった小笠原嘉子（一八八九～一九八九）のこと、三好は旧姓。「江原氏」は政治家、教育者で麻布学園の創始者であった江原素六（一八四二～一九二二）のこと。「島田氏」は政治家、ジャーナリストであった島田三郎（一八五二～一九二三）のこと。「三宅氏」は女性問題評論家であった三宅やす子（一八九〇～一九三二）のこと。「岩本氏」は明治女学校の創始者で女性教育家、評論家であった巖本善治（一八六三～一九四二）のこと。

## 解

この論文で柏木は「一夫一婦制」について論じているのであるが、具体的には公娼制の廃止の提言と実施を現実化することを目している。この政治的目標を柏木は上毛春期婦人大会と上毛婦人矯風会に託するのである。このような大きな課題の解決を一地方の婦人団体に託するというこの判断、是非は別にして柏木の思いには切なるものがある。論の後半ではかなり具体的な方策を提言しているが、それらを見ると、彼のこの課題に対する思いに至るであろう。「一夫一婦制」の提言は、柏木においてはそのまま過去の日本の男女関係のありかたへの痛烈な反省と批判とにつながっていた。東本願寺大谷某批判はその文脈上にある。

第四号の末尾に、上毛婦人矯風会が、一月二三日に高崎教会において開催された由の記事がある。それは「去る一月二十三日高崎教会堂に於て役人会を開きて其運動方を相談したるに来る三月上旬中に矯風会に熱心にして且つ有名な内外の弁士二〇を招聘して高崎に於て演説会を開くとに決したる由」である。

○第五号（明治三十二年三月一五日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎 敢て問ふ（其一）



凡ての人は必ず先づ此間に確答せざる可らず。曰く、神・有・る・や・無・し・やと。神果して無しと断言し得るか。乃ち是れ容易ならざる断言と為さざるを得ず。人は果して如何なる論拠ありてか能く此断言を為し得るか。人間の作くりし製作品すら尚ほ其形成せら、以前既に無形の思想となりて先づ人の頭脳中に在せざる可らざるに非ずや。此美妙に充ち智尽くし理至れる龐大なる意匠の在する宇宙は独り無形の大思想の生み出したるものに非ずとするか。電気光熱引力等物質界の自然力が果して如何して此至大至剛大地の間に塞がりし身を殺して仁を為すてふ天地間尤も雄大壮美なる道義の元気を産出するを得たるか。物質以上に超出したる玄之又玄なる心靈界を認めずして果して如何にして天地間尤も高尚に最も聖に最も美なるものを説明し得るか。正は必ず勝たざる可らず。邪は必ず破れざる可らず。善は必ず福あり。悪には必ず禍ありとも普ねく万人の心庭に刻記せられて牢として抜くからざるの確信は果して根拠なき妄信なりと断言し得るか、若し否らずんば此確信の基く所果して如何。正義若し人間以上の權威に基かずんば人は何故に正義のために勢力に抗して斃れざる可らざるか、人は勢力に抗して義を守りて玉碎す可きか。將た又勢力に阿附して瓦全す可きか。果して神なくば勢力に随順して己れを全ふするは正に是れ智者の所為にして身を殺して仁を為すを賞讃する万人の良心は反て是『フンセンズ』（譚語）に非ずや。抑友に疑ふれ、親に離れ、衆人に棄てられ孤立正を守るの時、或は風流荒れ濤怒り一葉の破舟身を風浪に委ぬるの時將た又死の手我を捉へて此の世の希望尽き果てし時、果して何に由りて心安きを得るか。更深け夜静なるの時、孤灯の下肅然襟を正して真面目に瞑想し来らば人は果して能く神無しと断言し得るか。容易に神無しと断言するは未だ艱難に臨まずして艱難に耐ゆる易々たるのみと大言壮語する輕薄者流の誇言に似ざるなきか。真面目に醒めて神無しと断言するは容易の事に非るなり。神果して有りと曰ふか、果して之に事するの誠意あるか、果して何物よりも神を重じて心身を之獻ぐるの決心あるか。蓋ぞ戦々恐々惶懼して之に事へんことを励めざる蓋ぞ

熱心其聖旨の存する書知らんことを求めざる。『我を見しものは父を見しなり』（約翰伝十四の九）。基督活ける身を以て神を顕現し玉へり。神意を知る豈之より明瞭なるものあらんや。蓋ぞ来りて基督に就て学ばざる。苟も神有りと信ずるか。一日も之に事するを猶予す可きに非るなり。既に神ありと曰て之に事する誠意なきか、是れ誠実の人に非らず、信ず可き人物に非るなり。

若し夫れ神有るか無きかを明に断ぜんことを求めず、唯曖昧に附し去るものゝ如き世間滔々皆其人にして到底物慾に掩れて真理を慕ひ道義を求むるの誠意鏘びたるものならざるを得ず。

トルストイ伯曰く『吾人は人生の要務を知らざる可らず。既に之を知れば刻々之を踐行せざる可らず。何となれば人生の一刻は乃ち人生の最後たる可ざれば也と。何ぞ其れ真面目なる神有るや無しや之を決するは実に人生の要務を知るの第一着手なり。敢て問ふ。孰れに決する所ぞ。』

## 註

（一）新約聖書「ヨハネによる福音書」一四章九節中の、イエスのことば。

（二）実はトルストイからの引用の最後の部分は不明瞭である。

## 解

「敢て問ふ」と題したとおり、柏木が満を持して執筆した「無神論」批判の文章である。単純に、神有り、と断ずるのではなく、善悪を判断する良心、そしてキリストの存在に至つて論を展開している。長い文章ではないが、よく練られたものである。このような深淵であり、かつ観念的なテーマは柏木が礼拝説教でしばしば取り上げたものであったという（菅井吉郎『柏木義円伝』春秋社、一九七二）。

## ○第六号（明治三二年四月一五日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎

養蚕季節將に來らんとす

養蚕季節將に來らんとす。養蚕季節は是れ殖産場裡に於ける上毛の大戦争、老人より小供に至るまで全力を尽くして目醒しく働くの時なり。心身を活動せしむる、蓋し此時より大なるはなし。実に喜ぶ可き大切なる時季と謂ざるを得ず。吾人は此時季に於ける心身の活動が愈々活発ならんことを望む。而して吾人は更に信仰的精神が此活動に伴ふて活動せんことを希望の至に堪へざるなり。若し宗教にして活花や茶の湯の如く閑人の道楽ならしめば人生多忙の時は頓挫を來たざるを得ず。然れども果して宗教にして人間須臾も離る可らざるの大道にして神に対する真成の生命ならしめば多忙極りて心身の活動大なる時は信仰の精神愈々活動せざるを得ず。吾人の信ずる宗教が真なるか仮なるか、自然なるか作為なるか、道楽なるか生命なるか、多忙は即ち之を判ずるの試金石なり。多忙に逢ふて忘れらるゝ宗教は果然是れ儀式的作為的仮飾的道楽的の信仰にして信仰と実行と相離れたる宗教なり。唯真実なる生命的信仰は多忙の際に愈々其作用を現はす可し。活動社会に伴ふ事能はざるの宗教は無用の長物なり。真に作用あるの宗教は多忙の際に愈々其実力を示さるゝを得ず。苟も我に其心柱あらんか。間暇無事の時よりも寧ろ僅かなる時間を偷で祈る祈禱は力あるものなり。終日為すことなき日より寧ろ零細なる時間を得て玩読する聖書に味ひあるものなり。小人閑居して不善を為すとの古言に引き換へ多忙は大に吾人の精神を發揮するものなり。要するに唯吾人の覚悟如何に在り。此多忙なる養蚕季節に際し大に殖産上の收獲を得るのみならず必ずや信仰の精神を以て之を為さんと心の心柱兄弟の心中や確乎として存せんことを希望の至に堪へざるなり。既に此心柱あらば祈禱を為し、聖書を読むの余裕は綽々として存す可し。而して其多忙なる活動の神の御用を勤めつゝあるなりとの自覚あらば勇しく喜ばしく成効せば感謝に充ち失敗亦安ずる所あり。心中の平和実は無量なるものあらん。吾人は愛兄弟の信仰が此多忙の際に鍛鍊せられんことを祈る。

且つ会堂に於ける礼拝集会の如き依然常の如く執行せられ可成繰合して多くの兄弟が参会せられ参会するを得ざる兄弟も必ず此集会を記憶せられ養蚕季節と雖ども決して信仰の頓挫を來さざるのみか反て特種の経験を得て此際信仰の勢力を増さんことを吾人は諸兄弟と共に切に大父に祈らんことを欲するなり。篤信の兄弟、希くば之が為に祈禱の力を借されんことを。

## 註

(1) 例年、春は春蚕とよばれ、養蚕の作業の繁忙期である。その季節に入ると、蚕の世話は待ったなしで夜も昼もなく蚕が繭を作り終わるまで続いた。

## 解

この記事の書かれ、掲載された三月、四月は春蚕とよばれる養蚕業の繁忙期であつた安中教会では、養蚕業を営む会員も多く、論中で言及、危惧されたように、たしかに礼拝出席者数が減少したものと思われる。この月の「教報」欄の安中教会の「教況」に載せられた三月の礼拝に関して、第一聖日の礼拝出席者数が五八名であつたのに対し、第二聖日は二六名、第三聖日は二九名、第四聖日は三〇名、翌月の「月報」「教報」の同欄では、第一聖日は九名、第二聖日は二三名、第三聖日は七名、第四聖日は六名、第五聖日は四名とかなり少なくなつていた。牧者柏木は、多忙な毎日の仕事によつてなかなか礼拝に出席できない会員に対して非難することは決してしない。彼が養蚕という多忙な日常にあつて神を拝し、信仰の活動をするこの意味を切々と説いていることに感銘を覚える。

○第七号（明治三二年三月一五日） 発行人兼印刷人 大久保真次郎  
基督教を信ぜざれば日本国は亡びん

是れ去る二十日錦輝館<sup>①</sup>の大演説会に於て松村介石氏が喝破して波瀾を捲き起したるの警語なり。新紙の報ずる所に由れば氏が斯く喝破するや館内喧々囂々起賛否交々起り仏教徒は得たりと『無礼な事を言ふな』『国賊』『曳き摺り下ろせ』と叫び又一方には黙れと制するものあり。満場宛がら怒涛の捲き立つが如し。流石の松村氏も論歩を進むる事能はず憤然卓を打て『基督教を信ぜざれば日本国は亡ぶ可し』と大喝して降壇せられ、去る廿四日第二回錦輝館の大演説会には更に『亡国の理由』と題して大に絶叫せられたり。

つまらぬことをも讃め立て日本万歳と呼べば浮かれて歓呼し侃々諤々苦がき言を以て国民を警戒すれば国賊と罵り無礼と叫ぶ。若し今日の青年をして皆輕佻此の如きものならしめば則ち是れ日本亡国の兆に非ざるか。然れども日本の青年皆未だ此の如きの徒のみならざるなり。

幾千の聴衆ガリヤの野に基督を擁し幾万の群民エルサレム城に主耶蘇を迎へしは是れ基督より其自矜の倨傲なる病的愛国心に投合するの言を聞かんとてなり。而して反て之を十字架上に殺害するに至りしは『噫々エルサレムよエルサレムよ、預言者を殺し爾に遣さるゝ者を石にて撃つものよ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く我爾曹の赤子を集めんとせしこと幾次ぞや。然れど爾曹は好まざりき。視よ爾曹の家は荒地となりて遺こされん』との沈痛悲壯の言を為して我を容れざれば猶太国は亡び差しも宏壮美麗なる耶城を一つの石も石の上に崩れずしては遺こらじと喝破せしを怒りしが故に非ずや。既に道の化身たる基督を示され尚ほ傲玩之を容れず。而して尚ほ亡びざるを得るかとは是れ個人的に取りても国家に取りても極めて嚴肅なる問題に非るか。基督決然身を殺して此問題を人類の前に提出し玉へり。基督の断案は果して如何。個人も国家も我も信ぜずとも可なりとは果して是れ基督の此問題に於ける解決なりしか。非基督教国の現状及び将来の運命如何、其名は基督教国たるも其実基督教の生命活動し居らざる国々の現状及び将来は如何。土耳其<sup>③</sup>、波斯<sup>④</sup>、暹羅<sup>⑤</sup>、支那、朝鮮の過去現在及び将来は如何。實に是れ憂国者の醒めて考ふ可き嚴肅なる問題に非ずや。仏

教演説会に一人の青年僧侶、基督教が国家に害ある事を説き見よ今日阿弗利加の如き、印度の如き、布哇の如き基督教徒は巧に之を侵略しつゝあるに非ずや。支那の如きも威海衛を英国に、旅順口を露西亜に、膠州湾を独逸に取られ、皆基督教徒の為に滅ぼされんとするに非ずや。仏教信徒たる印度支那日本の如きは未だ嘗て他国を侵略したることなしと。弁し去るや聴衆中より一個の海軍兵士現はれ出で僧侶に賛同して曰く『真に基督教は他国を侵略すとの貴説に承服せり。然らば日本は基仏何れを信じて善かる可きや。他国を侵略する宗教なるか、他国に侵略せらるゝ宗教なるか、甚だ惑ふなり』と肺病人の如く次第に国勢を衰弱せしむる消極的の宗教なるか。抑元氣を活動せしめて天国を世界に打立てんとする雄心勃勃たる積極的の宗教なるか。宗教問題は是れ単に個人の問題に非ず、抑亦国家の安危に関する重大なる問題なり。松村氏が敢て此爆裂弾を投じて世人の注意を喚起したるか近頃快心の事と謂ざるを得ず。

国家の長策も敵の名を成すと見れば之を破壊するの至らざらんことを恐れ、己れの勢力を扶植する為には国家に不利なることも民人の疾苦に関することも忍んで之を主張する此の如きは是れ万歳の国家なるか。此の如くして得たる權勢地位果して何の用にか供する。自ら銜ぶて俗人に誇示するに非れば己れの我意を逞して自ら快とするのみ。將た否らざれば之を利用して以て富を攫取するに供するのみ。此の如きは是れ万歳の国家なるか、富と地位とを得る為には人を欺く可し。世を欺く可し。媚びも売る可く人をも陥擠す可し。而して其得たる富、之を何事にか用ゆる、以て淫欲奢靡を恣にするなり。以て人の良心を買ふて世論を腐敗せしむるなり。此の如きは是れ万歳の国家なるか。日本は仏教国と称し、其本願寺法主<sup>⑥</sup>は幾百万の門徒より活仏と随喜せられ年々幾十万の喜捨金を得、日本多数の人心を嚮導すると信ず。而して爵位はすかざらず之を求め大谷家累代の家法として姻を權門勢家に結び近頃<sup>⑦</sup>に於てもやん事なき御方に其女嫁せんとの運動をさくゝ怠りもなしと伝ふ。其戸籍には多の妾と私生児とが公々然登録せらる。本朝

議會に於て神鞭知常氏<sup>⑦</sup>は日本の在監人は皆、仏教徒なりとて、仏教々誨師を巢鴨監獄より出せしを難ぜられ、仏教徒亦此趣意を以て運動したり。日本の在監人を悉皆出したる、仏教之を恥辱ともせずして、反て之を以て論拠としたる、仏教此の如き宗教を以て日本人多数の宗教と爲す。其れ此の如きは果して万歳なる国家なるか。永く不潔の空氣中に生息するものは遂に其空氣の汚れ居るを覺らざるが如く高尚なる理想を示す權威ある教あるに非れば、人心次第に卑きに就き、前に見て以て不快とせし醜行も後には遂に見て以て怪まざるに至り、社会は日に墮落せんとす。今や我國の人心を正す可き權威ある教あるが一国の主腦たる可き教育界に於てすら、德育上には殆ど無定見なる有様に非ずや。幾十万の少年青年の感受し易き精神を其掌中に握り乍ら德育上の本領なく茫手として其爲す所を知らざるは是れ現今教育界の実況に非ずや。国家の危険豈此れより甚しきあらんや。然るも尚ほ万歳なる国家なるか。カールエル言はずや『真人は真に己れより以上なる人を畏敬することによりて自らを高むるに至るを感じざるものなし。大人崇拜の念より高尚なる感念は人心中に嘗て存せざるなり。世は不信仰となり革命は之か爲に起り社会の組織は全く崩壊するも此に崩壊す可らざる英雄崇拜の念でふ隅の首石あり。社会は此根基より更に再造を始むるを得、英雄崇拜の念は是れ土崩瓦解の中にも屹然たる活ける磐なり。これなくんば社会は全く無根柢なり』と。今や我國は国民の崇敬心を惹て一世の人心を指導して正を踏んで進ましむるの大人物あるか。滔々たる我邦の社会は畏敬の念を以て天爵の我より上なる者を崇尚するの真面目あるか。抑古人を崇尚して心術を正し操行を砥礪するの誠意あるか。今日の我社会には果して真成の英雄崇拜心あるか。一の不義を爲し一の無事を殺す天下を得るもせざるなりと云ふが如き彼の堂々たる蕃山<sup>⑧</sup>の心は果して我青年の心とする所なるか。故新島襄先生嘗て英雄崇拜を論じて曰く『日本の英雄にして利己的ならざるもの甚だ少し。反て英雄は常人よりも私心多し。若し我邦人にして英雄中の英雄世界が曾て産出したる最大英雄（基督）に其心を帰向するに至らば將

來の日本は慥かに革変す可し。彼は遙かに孔子ソクラテース<sup>⑨</sup>よりは大なり。然れども尚ほ貧民の友たり。彼は遠くアレキサンデル<sup>⑩</sup>、ナポレオン<sup>⑪</sup>に超るたり。此英雄は己れの功名心を充たす為に幾十万の無事の血を流したり。然るに彼は反て人類の爲に己れの血を灑ぎたりと此大英雄に崇尚帰向するの真面目なる向上心もなく、未だ一国の人心を統一する可き權威ある教を有す能はず。此の如き国家は果して万歳の国家なるか。基督を十字架に殺したる猶太の国家は恐ろしき滅亡を見たり。基督を輕侮し其教を蔑視するの国民は到底天の討誅を免る可らず。皇上帝<sup>⑫</sup>願くは我國家を祝し玉へアーメン。

本篇中青年僧侶の演説及び神鞭氏云々は江原素六氏演説に拠る。

## 註

- (1) 東京、神田にかつてあつたホール。
- (2) 「東京毎週新誌」のことと思われるが、この名での週刊伝道誌は一九〇〇（明治三三）年の八五四号からのものであり、その前年では「基督教新聞」と称していた。したがって、ここにいう「新紙」はこのままでは特定し難い。
- (3) トルコのこと。
- (4) ベルシャのこと。
- (5) シャム、現在のタイ。
- (6) 第二二代東本願寺法主であつた現如こと大谷光瑩。前出。
- (7) こうむちともつね。一八四八〜一九〇六。官僚、政治家。
- (8) 熊沢蕃山（一六一九〜一六九二）。江戸時代初期の陽明学者。この「一の不義を爲し、一の無事を殺す……」はその著『集義和書』巻第一書簡之一にある「一の不義を行ひ一の不幸をころして天下を得ることをせざる所は、朱子・王子かはりなく候」によるものと思われる。なお、「一の不義を……」は孟子、公孫丑上に見えることばをひたもの。また「王子」は王陽明のこと。柏木は、日本の倫理思想のコレクションである『日本倫理彙編』を購



入した形跡が日記にみられるので、そのなかに収められている熊沢蕃山の『集義外書』は読んでいたと思われるが、『日本倫理彙編』には収められていない『集義和書』も読んでいたことがわかる。註11も参照のこと。

(9) ソクラテス。古代ギリシャの哲学者。？・B・C三九九。

(10) アレキサンダー。古代ギリシャの王。？・B・C三二三。

(11) 明治期プロテスタント初期の「神」の呼称のひとつ。陽明学的な匂いをする語法。柏木は陽明学に対して肯定的な評価をしていたと思われる。柏木は近代陽明学の初期の研究者であつた京都帝国大学教授の高瀬武次郎の概説書『陽明学新論』を熟読していた。市川『柏木義円と親鸞』（二〇一六、ぺりかん社）参照。

## 解

松村介石（一八五九～一九三九）の「基督教を信じざれば日本国は亡びん」という演説を紹介することから、日本国家の倫理性を問うという大きな課題を掲げた論考である。松村は、当時、内村鑑三、植村正久とともに「三村」と称された著名なキリスト者で、のちにユニテリアンに転向し、「道会」を主宰した人物。柏木は基本的に国家に敵対していたわけではなく、日本が倫理性ある国家となるべく努めるべきと考えていた。その文脈で、東本願寺法主を批判したり、神に我が国家について祈ったりしている。